



和六十年代

代表作時代小説

日本文藝家協会編



編纂委員

伊藤桂一

尾崎秀樹

網淵謙錠

武蔵野次郎

村上元三

東京文藝社

昭和六十年度

代表作時代小説 定価二〇〇〇円

昭和六十年五月二十日 発行

編纂者 日本文藝家協会

発行者 角谷かをり

発行所 株式会社東京文藝社

東京都新宿区払方町一番地
振替・東京六一二一七五七
電話・(二六〇)二五五〇

ISBN4-8088-3139-2

無検印承認

ま え が き

伊 藤 桂 一

私は、時代小説というのは、その作家にとっての、一話ずつの「千夜一夜物語」ではないかと思っている。時代小説の人氣がすたれないのは、時代小説の基底に、千夜一夜物語風な、夢とロマンを誕
むたのしさがあるからだと思う。それがつねに、変化に富んだ花を咲かせながら、時代小説の歴史を
織ってきている。

「代表作時代小説」は、昭和三十年代版から数えて、実に三十一年間三十一巻を数えるまで、年々
の、千夜一夜物語の、もっとも傑出した作品を収録してきたのだから、刊行以来、つねに新しい読者
を獲得してきているのは当然だと思う。多くの、読みすてられてしまう消耗品の小説とは、自ら類を
異にしているのである。

それだけに、時代小説は、制作するのにむづかしいところがあり、手を抜くことができない。作家
それぞれが、そのエネルギーと秘策をつくして物語をつくってくれるので、そこに面白い作品がで
き、時代小説のファンも生まれてくることになる。

私の詩友で、難解な前衛詩みたいなのをせっせと書いている人がいて、ふだん哲学書でも読んでい
るのかと思ったら、愛読書は時代小説であった。単に頭休めというのでなく、面白いから読むのだ、

といていた。どういふ作家のものが面白いかといったら、時代小説と名のつくものはみな面白いが、ことに捕物帳がよい、半七捕物帳と久生十蘭のものはもともと読みごたえがある、といったので、ほんものの読者なのだな、と思った。

時代小説作家はみな、時代小説ファンの人たちが、身を入れて時代小説を読んでくれていることをよく知っている。従って、身を入れて執筆することになる。そうした執筆態度、作家の息づかいを、この代表作集を選んでいても、まことに身近に感ずる。ただ、収録枚数に限界があり、あまりに長いものはどうしても採れないので、惜しみ惜しみ見送ることになり、そのことがいつまでも頭に残っていたりする。

ここに、昭和六十年代版を、従来とかわりない充実した内容をもってまとめることが出来、編集委員の末席にいる一人として、私はたいへん嬉しい。その嬉しさの中には、ここ十数年間に時代小説の長老、中堅を何人が失ってきたその痛手が、ようやくしつかりと埋められはじめていることを、この集の収録作品をみて感じるからである。むろん、長文のため収録不可能だった作品をも含めてである。

世相はますます乱脈雑駁をきわめてゆくだろうが、ひとり「代表作時代小説」のみは、さわやかな水脈を残して進んでゆく。心ある読者諸子の支持と声援のもとに。

目 次

江戸大森三右衛門 井上ひさし 七

猿ヶ辻風聞 滝口康彦 七

明治兜割り 津本陽 完

蝦夷狼の挽歌 戸川幸夫 六

春色大川端 平岩弓枝 五

死神小町 栗本薫 一五

鬼門関 駒田信二 二五

義(ぎ) 綱淵謙錠 二三

ニコライ皇太子の写真 伴野朗 二九

八郎、仆れたり 三好徹 一三

悲の枕 澤田ふじ子 一九

浪人神楽 伊藤桂一 二九

疑惑の眼 南條範夫 三七

妻よ、わが軌跡を	尾崎 秀樹	二四
十八両の妻	村上 元三	二五
萩寺の姉弟	早乙女 貢	二六
明治吸血鬼	日影 丈吉	二七
木 槿	安西 篤子	二九
孤影は峠を越えた	笹沢 左保	三五
奉行たちの宴	白石 一郎	四二
新兵衛の肚	羽山 信樹	四五
隠 し 子	池波 正太郎	三九
虫の鳴く宿	梅本 育子	三九
欺し欺され	多岐川 恭	四七
うらなり与右衛門	藤沢 周平	四三

まえがき 伊藤 桂一
 あとがき 武蔵野次郎

装幀
村上
豊

作者のことは

赤穂義士は偉い、立派だ、尊い、それはよくわかつてゐる。しかし不義士のなかにも、なかなかの人物がいたのではないだろうか。また卑怯未練な男もいたにはちがいないが、その男はその男なりに、卑怯未練の筋を通したのではないだろうか。——そんなことを考えながら不義士列伝を書きついでおります。

昭和九年十一月十七日 山形県生

「道元の冒険」にて第十七回岸田戯曲賞受賞

「手鎖心中」にて第六十七回直木賞受賞

「吉里吉里人」にて第二回SF大賞受賞

主著——「表裏源内蛙合戦」

江戸留書役 大森三右衛門

井 上 ひさし

「ほう、これがこの両国西広小路は丸屋自慢の蕎麦饅頭か。……うまい。亭主、うまいぞ。たんと砂糖を使っているな。これで五文では儲かるまいに。もっとも、この丸屋の蕎麦饅頭、甘くて、大きくて、安くて江戸市中では近頃大評判、一日七、八百からの客が詰めかけてくるといふ。一個からあがる利益はたとえ薄くとも多く売れば教年で蔵が立つと、しっかり算盤は弾いて居るのだらう。図星だらうが、のう、亭主。わしの前の皿から蕎麦饅頭を切らすではないぞ。皿の上が淋しくなったら透かさず五個六個と補充してくれよ。すくなくとも二十個は喰うぞ。」

「無理をなさいますな」だと？「丸屋はこの極月、一日も休まず見世を開けております。暴れ喰いなさらずに、またお出かけくださいまし」だと？

医者だよ、このわしは。馬喰町界限での綽名は藪医起庵先生、たしかに頼りない医者だが、とにかく医者は医者さ、腹も身の内、腹八分目に医者いらす、という養生訓ぐらゐは心得ている。心配いたすな。それにわしの実の兄がこの蕎麦饅頭の暴れ喰いが原因で一命を落したことがあってな、それ以来、用心が上にも用心をして蕎麦饅頭を盛った皿の前に坐ることにしているのだ。兄の轍

を踏みたくはない。兄弟して蕎麦饅頭のために頓死したのでは御先祖様に合せる顔がない。かならず腹八分目でやめる故、安心して運んでくるがいい。

これ、五平。おまえは馬喰町まで一トツ走りしてきてくれ。口上はこうだ。「両国の西広小路に丸屋という菓子見世兼蕎麦見世があるが、その蕎麦饅頭は絶品である。土産に持って帰ってもよいが、やはり蕎麦饅頭は蒸かしたそばから次々に喰らうのが一番、この竹村一学が席をしっかりと確保しておく。お琴どのも吉之進も早速に駆けつけられよ」とな。さあ、五平、復唱してみなさい。

……よしよし。今の口上にもう一ト言付け加えようか。「この一年十ヶ月、血眼で喰い歩いた甲斐あって、ついに真正正銘の、天下一の蕎麦饅頭に巡り合うことができた」と、こうだ。おいおい、五平、饅頭を三つ四つ懐中に入れて道々喰って行くがいい。だが、急いでくれよ、五平。

ときに亭主、この蕎麦饅頭だが、他の見世と、製法がどうかうのだね。差し支えなければ後学のために教えてもらいたい。大凡のところはわしにも見当がつく。まず蕎麦粉だが、それだけでは皮がぼろぼろと崩れてしまふから、繋ぎ粉を混ぜなくてはならない。繋ぎ粉は小麦粉だらう。なに、「梗米の粉」？なるほど、この皮の何ともいえない粘りは梗米の粉のせいだ。「それに大和

芋を摺りおろして捏ねたのが皮です」？　そうか、蕎麦粉と粳米の粉に大和芋を摺りおろして捏ねた皮で、砂糖入りの漉し餡を包んで蒸しあげたわけか。手が込んでゐるな。今、耳にした製法の秘密を日本橋照降町の伊勢大掾に売り込んでやるとするか。伊勢大掾の名物は知つての通り羊羹だが、蕎麦饅頭にも色目を使つてゐるというから、あそこの主人に今の話をしてやれば小判一枚ぐらゐにはなるかもしれない。怒るな、亭主、冗談だよ。

菓子見世に蕎麦見世を兼ねたこの丸屋に酒が置いてないのは百も承知だが、亭主、おまえさんの飲み料ぐらゐは内証に買つてあるだらう。五合徳利に一本でいい、そいつを頒けてくれまいか。焙じ茶ばかりでは曲がない。そういう疑い深そうな眼で見えてはいけない。銭は持つてゐる。ほれ、元禄二銖金が一の二の三の……八粒。八粒でちょうど一兩。喰い逃げ、飲み逃げが心配ならこの八粒全部預けておこう。受け取つておけ。そうそう、仕上

げは蕎麦切だ。蕎麦切の津汁の出しは何だね。「水一升に清酒五合を混ぜ、乾し鰹をごろんと入れて緩火で煮たものに溜醬油を入れて味付けしてあります。そのときに使う清酒を持つてまいります」？　出しは清酒と乾し鰹だけかね、ちょっと淋しいな。「そのかわり薬味が凄いい」？　ほう、どんな薬味だ。「大根のしぼり汁、花鰹、山葵、刻み蜜柑皮、紫海苔、焼味噌、梅干などをお好み

に應じて蕎麦切の上にのせて召しあがれ」？　「なお、湯葉は初手から蕎麦切の上のつております」？　擬つたものだな。話を聞いているうちに年甲斐もなくわくわくしてきた。蕎麦饅頭は半分の十個に抑えて、かわりに蕎麦切一杯を二杯に直そうかな。まあ、いい。それはお琴どのや吉之進が来てから決めることにしよう。とにかく今のところは酒を頼む。

ときにそちらの御浪人、よろしければそちらへお邪魔したいのだが、構いませぬかな。ひとりで饅頭を喰らうというのもお互い味気のない話だし、じつは饅頭退治の助太刀をお願いしたいのですわい。お耳に達しましたかどうか、亭主には「蕎麦饅頭を二十個」などと威勢のいいことを申しましたが、正直のところ、蕎麦饅頭と蕎麦切には辟易してしまいました。とりわけ蕎麦饅頭は、見るだけでウツと吐きたくなるぐらいで、どうか助けると思つて召しあがつてくだされ。いやいや、そちらが大の蕎麦饅頭好きでおいでだということ、この竹村一学、よく知つております。わたくしはそちらとは一足おくられてこの丸屋へ入つてまいつたのですが、そのとき、そちらは亭主に向つて、

「この世の名残りに蕎麦饅頭を思ふ存分喰いたい。大皿に山と積み上げて持つてきてくれ」

と申されておいでだった。「この世の名残りに」とは

もとより言葉の綾でしようが、しかしこれは普通の饅頭好きには云えないことで、余程の饅頭喰いに相違ないと、さきほどからそのお手並みをひそかに拝見しておりました。そしてこちらの目に狂いはなかった。そちらは饅頭を口に押し込み、同時に焙じ茶をぐくり、たった二動作で一個を嚙み下しになり、十個盛った皿をまたく間に空にしておしまひになった。そればかりか、呼吸にいささかの乱れもなく亭主に向い物静かに、

「もう十個持つてきてくれ」

と申されておいでだった。みごとなものです。天晴れな喰いッ振りです。ほればれするような健啖家（けんたんか）でいらっしやる。失礼ながら、そちらの豪傑喰いにすっかり惚れ込んでしまいました。さあさ、どうぞ、こちらの皿も綺麗にしまってください。

わたくしも本当は蕎麦饅頭が好物なのです。馬喰町で医者をやっております、同じ屋根の下に、亡くなった実兄の妻で琴と申す女と、実兄の子で吉之進と申す若者、それに医者見習に下僕の五平を加えて五人で暮しておりますが、その五人、いずれも蕎麦饅頭を日に少くも十個は食しております。いくら好物でも毎日、口にしていたのでは飽きてしまいますわい。わたくしなぞはこの丸屋が今日三軒目の見世、辟易もするわけですな。ただし、お琴どのや吉之進はこの数日、蕎麦饅頭とは縁が切

れている筈、そこで五平を馬喰町へ走らせたのでした。

おお、酒がきました。おひとついかがですか。わたくしをいやに馴れ馴れしい男とお思いでしょうが、じつはそちらを天下無双の蕎麦饅頭喰いと見込んでお願いがあります。それで席を移ってきたのですよ。そのお願いの筋というのはこうです。これから一年、いや、場合によっては三年、毎日、この江戸市中の菓子見世兼蕎麦見世を食べ歩いていただきたい。現在、江戸には百五十軒前後の、この手の見世があるといいますが、御苦労でもその百五十軒の見世を風潰しに一軒一軒歩いていただきたいのです。そして一軒の見世にすくなくとも半刻（はんこく、約一時間）は腰を据えて、人の出入りを凝と御觀察いただきたい。そう、一日に最低五軒は見回っていただきたいでしょう。申すまでもありませんが、飲み喰いの費用はこの竹村一学が負担いたします。勿論、給金もお払い申し上げます。その給金は月に金五両。いかがでしょう、決して悪い話ではないと思いますが、菓子見世兼蕎麦見世を回って何をしていたのかと申しますと、これがじつは人探しで……。菓子見世兼蕎麦見世にかならず姿を現わすにちがいないある人物を見つけ出していただきたいのです。そしてその人物のあとをつけて行き、その住居を突き止めて、わたくしどもに教えてくださればよろしい。そのときは特別に御褒美を差しあげましょう。すく

なくとも金百両、それはお約束いたします。もとよりわれら五人も、この手の見世をぐるぐる回ってその人物を探しておりますから、こちらの方が先にその人物を見つけ出すかもしれません、その場合でもそちらには金五十両ぐらいのお礼はさせていただきますつもりでおります。

そう邪慳に背中をお向けにならないでくださいませんか、お願いですから。せめてお仕舞いまでわたくしの話を聞いてやってください。その人物の面相と申しますのは……、いや、その前になにゆえにわれら五人がその人物を鉄の草鞋で探し求めているのか、そのことからお話し申しあげましょう。その方がより強く興味を持っていただけだと思います。さきほど、わたくしは亭主に対し、「わしの実の兄がこの蕎麦饅頭の暴れ喰いが原因で一命を落したことがあってウンヌン」と申しましたが、あれは嘘でもなければ冗談でもない、真実、兄は蕎麦饅頭で非業の最後をとげたのです。

時は元禄十四巳歳、すなわち去年の三月十七日午後、所は南八丁堀湊町稻荷前の菓子見世兼蕎麦見世小松屋の見世先。おや、うれしや、こちらに向き直ってくださいましたね。ありがたい。わたくしの兄と申しますのは、信州上田五万八千石仙石越前守政明様の内証用人で弓削佐次馬と云い、三百五十石を頂戴しておりました。御存知のように上田は蕎麦どころ更科に近く、そのせいもあ

ってか、兄は大的蕎麦好きでした。蕎麦と名の付くものならば、蕎麦切や蕎麦饅頭は無論のこと、蕎麦練、蕎麦焼餅、蕎麦落雁、蕎麦保字留、蕎麦板などなんでもよく食べた。蕎麦板というのを召しあがったことはおありですか。蕎麦粉と小麦粉を蜂蜜水で練り、薄く延したのを短冊形に切り、竈で焼いた干菓子ですが、江戸にはまだないようです。表に黒胡麻が振りかけてある。蜂蜜に胡麻の香がよく合う。乾いているが脆くて、舌にのせるとみるみるうちに溶けてしまう。春の淡雪のような風情の菓子ですが、兄は嫂によくこの蕎麦板をつくらせておりましたよ。それほど好きだったのですな。

兄はまた御役目の暇を見つけては江戸市中の見世を食べ歩いておりました。そのころ、わたくしもまた信州上田仙石家の江戸の御屋敷で大納戸方を仰せつかっておりましたから、兄とはちよく顔を合せる機会がありました。行き会うたびに兄は、「吉原の仁右衛門見世の蕎麦切は結構いけるぞ」だの、「四谷村の信濃屋の蕎麦饅頭は喰うな。皮がねちゃついて始末が悪い」だのと、食べ歩きの結果を耳打ちしてくれたものです。ここで注釈を加えておきますと、兄は弓削家を継ぎ、この一学は弓削家の次男坊、二十八歳まで部屋住みの冷飯喰い、医者にもなるはかあるまいと考えて京に出て修業中のところを、家中の竹村家に望まれて養子に入ったのです。

兄が奔走してこの縁組をまとめてくれました。もう一昔も前の話になりますが……。おや、いかなさいましたかな。饅頭がちつとも減っておりませんぞ。他の饅頭とちがつて蕎麦饅頭は温かいうちが花、さあ、召しあがれ。この一学も一個二個いただきましょう。饅頭を召しあがろうとなさらぬのは、あるいはわたくしの話に興味を覚えてくださったからでしょうか。もしもそうなら嬉しい限りですな。熱を入れてお聞きいただくと、それだけこちらにも気合が入ります。

さて去年の弥生の十七日午後、兄の弓削佐次馬はふらりとその小松屋に入った。蕎麦饅頭の食べ歩きですから、あまり他人様に自慢できる話ではない、それで兄は供の者も連れず、一人で見世の内部の床几に腰をおろした。そして亭主に向い、

「この小松屋の蕎麦饅頭は、江戸市中で現在もとても喰わせ、饅頭だとの噂であるが、わしは蕎麦饅頭に関してはおもうさ。長年にわたる蕎麦饅頭喰いの経験に基いた一言を持っておる。その噂の真偽のほどをわしが鑑定してやろう。とりあえず十個ばかり皿に盛ってまいれ」

と命じた。

そのとき、兄の真向いに居た武士が、兄をじろりと眺め、それから亭主にこう申したのだそうです。

「今さら誰に鑑定してもらふ必要もない。ここ小松屋の蕎麦饅頭は天下無敵だ。天下無敵の蕎麦饅頭喰いのこの大森三右衛門が江戸中を隈なく喰い歩いてそう太鼓判を捺したのだから万に一つの間違ひもない。亭主、この大森三右衛門の皿にも十個ほど継ぎ足してくれないか……」

おや、目を白黒なさっておりますな。饅頭が咽喉に悶えましたか。焙じ茶、焙じ茶。焙じ茶をぐつと飲んで悶えを下しておしまいなさい。つまり、兄とその大森三右衛門という武士とは、ぱつと一瞥を交しただけで敵対し合ったわけで……。やあ、今度は吃逆ですか。弱りましたな。昔から「吃逆が三日続けば死ぬ」と云いましょう。それぐらい吃逆というのは難物ですが、しかし三日も続くということはありますまい。なにそのうちにおさめますよ。「胡瓜の花は何の色、胡瓜の花は鬱金色」と繰り返し唱えれば吃逆が止まるというおまじないもあります。たとえ無駄でも唱えてみなされ。ひょっとしたら効くかもしれません。

兄とその大森三右衛門と名乗った武士とはその後、どうなったか。それはそちらにも推量がおつきになると思います。なにしろ双方とも、我こそは天下一の饅頭喰いなり、という自負があり、矜持を持っている。冷めたいことを云えば、双方とも、自分こそが蕎麦饅頭の鑑定は

日の本一番と鼻高々の天狗です。兄が、

「噂はどうまい饅頭とは思わぬが、しかしこういううま
くもない饅頭であつても、わしぐらいになると五十や六
十は楽にこなすぞ。亭主、饅頭を蒸籠ごと持ってこい」
と壮語すれば、大森三右衛門も売り言葉に買い言葉、
「拙者は焙じ茶なしで、しかも小半刻（約三十分間）の
うちに八十個は喰つてみせよう」

と豪語する。たちまち小松屋を二人で買い切つての蕎
麦饅頭の喰い競べになつてしまひました。ここで双方に
とつて不幸だったのは、小松屋の亭主が気をきかせたつ
もりか、あるいは殺氣だった兩人をなだめる親切心から
か、こう持ちかけたことでした。

「蕎麦饅頭の喰い競べが原因で喧嘩にでもなつた日には、
この亭主が浮ばれませぬ。この喰い競べを機縁としてお
二人が心腹の友になつていただけたら嬉しゅうございま
す。そのためにもお互いに御姓名をお名乗りになつては
いかがでございましょうか」

そこで兄は信州上田仙石家の家中であると名乗り、大
森三右衛門は、播州赤穂浅野家の江戸御屋敷の留書役で
十五石四人扶持を戴いていた者であると告げた。これは
あとで亭主から聞き出したことですが、名乗つたついで
に大森三右衛門は次のように付け加えたそうです。

「拙者は明朝、赤穂に向けて出立いたす。国論が籠城と

出るか、また殉死追腹と決するかは輕輩者の拙者には見
当もつき申さぬが、ともあれ、二度とこの江戸の土を踏
むことはあるまいと存ずる。当然、この小松屋の蕎麦饅
頭も今回が喰い納め。そこで今生の思い出に喰いまくる
所存でござれば、弓削どのとやら、御油断は禁物……」

蕎麦饅頭の喰い競べの結果はと云えば、小半刻のう
ちに、八十三個に対して六十一個。みごとに兄が惨敗いた
しました。間違ひが起つたのは勝負のついたその瞬間で、
大森三右衛門が、

「これに懲りて、以後はあまり大言壮語をなさらぬよう
に」

と云いつつ床几から立つたのへ、兄が、

「播州赤穂浅野家には変物奇人が多いとみえる」

と応じたのが惨劇の発端となりました。きつとなつて
こつちを睨んだ大森三右衛門に兄はさらに毒を含んだ言
葉の追い討ちをかけました。

「饅頭を大食して平然たる奇人があれば、せつかく殿中
で抜刀なさつておきながら憎い相手の息の根を止めるこ
とがおできにならなかつた変物もおいでだ。突くか、刺
せばよいものを、小サ刀で斬りつけられたとか。いやは
や話にも何もならぬわ……」

云い終ると同時に兄の右腕が宙を飛んでいたといいま
す。これも後で分つたことですが、大森三右衛門という

御仁は神夢想林崎流居合の達人だったそうで、その場に居合せた小松屋の亭主の話では、大森三右衛門は刀身を懷紙で拭いながら、

「戸板に載せて腕のいい金創医に担ぎ込め。当り前の手当てをほどこせば命は助かるだろう」

と申したといいますが、兄は一刻あとに絶命いたしました。……よかったです。吃逆が治ったようですね。ま、考えてみるまでもなく、これは兄が悪い。主君は切腹。御家は断絶。これから御城を枕に討死か。あるいは殉死の追腹か。打ちひしがれ追い詰められている赤穂の浪人衆に云っていいことと悪いことがある。にもかかわらず兄にはその区別がつかなかった。また同じく武士であるならば、明日は我身という古諺もあり、相手に惻隱の情を持つべきであった。ところが兄はあまりにも無慈悲な追い討ちをかけてしまった。だいたいが兄自身が意地汚い大食漢であった。したがって自分のことを棚に上げ、大森三右衛門に向って、「饅頭を大食して平然たる奇人」などと皮肉を云えた義理ではない。どこから見ても兄に落度があった。急を知って小松屋へ駆けつけ亭主から事件の一部始終を聞き出したこの竹村一学には、病氣による急死として処理するのが最善と思われたのですが、やはり人の口には戸は立てられぬもの、数日後、江戸詰の御家老に呼び出され、

「弓削佐次馬は弓削の家にとっては当主であり、その方にとっては実兄であろう。しかるに弓削家からも、またその方からもまだ敵討届書が提出されておらぬのはどうしたわけか」

と詰問されました。

以来、禄を離れ、病人の脈を診て生計を立てながら大森三右衛門の行方を追っておりますよ。大森三右衛門の「明朝、赤穂に向けて出立いたす」という言葉をたのみに播州赤穂まで出かけもしました。あるいは「大森三右衛門の父は秋田佐竹家の家中。三男坊の気易さで江戸の神夢想流道場に住み込んで修業をしているときに赤穂浅野家から仕官の口がかかったのだという」との噂を聞きつけて白河の関を越え陸奥深く足を踏み入れもしました。おかげで身も心もぼろぼろとなり、罰当りなことを云うようですが、敵討ぐらい疲れるものはありません。そうして苦勞に苦勞を積み重ねるうちに、心底から大森三右衛門を憎むようになりました。そうこうするうちに、

「敵の大森三右衛門は江戸に潜んでいるにちがいない」と云い出した者がある。この竹村一学の許で医者見習をしている矢田新兵衛です。この若者は嫂のお琴どこのの弟ですが、その新兵衛が云うには、

「大森三右衛門は自ら『天下無敵の蕎麦饅頭喰い』と誇っていた。江戸は蕎麦饅頭の本場、したがって彼奴は江